

複合的な子どもの問題に対処し得る協働関係

—学級担任と他の専門職の視点から—

所属校：葛飾区立南奥戸小学校

氏名：錦 織 俊 介

派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：協働・学校における他の専門職・児童の多様化・問題の複合化

I 研究の目的

定数 40 人の通常学級には、多様な個性と課題を持つ児童が存在している。また、子どもたちに現れる問題は、特別支援教育に見られる学習面や生活面の困難さ、不登校、家庭の問題、異文化、いじめなど多岐に渡り、複合的に絡み合っており、複数の問題を 1 人の児童が抱えている場合も多い。そのため、学級担任が抱える問題も複雑化し、学級経営も難しさが増している。

このような状況を解決する一助として、スクールカウンセラー(SC)の配置という対策がとられている。しかし、複合的で複雑な学校の問題がある中で、SCの導入における解決有効性は高いといえるのだろうか。また、SCが配置されたとして、学級担任の指導は大きく変化するのだろうか。

そこで、学校という組織の中での、教師と他の専門職との協力関係の可能性を考えてみる。本研究では、第1に、心理臨床家と教師の見立てがどのように異なるのか、同じなのかを調べ、児童の指導に対してどのような異同があるのかを明らかにする。その上で、第2に、学校という組織の中で、教師と他の専門職との協力関係がどのようにして可能なのかを考える。こうした分析を通じて、児童にとって、どのような対処策が必要なのかを考えることを目的とする。

II 研究の方法

- 1 先行研究を検討し、心理臨床家と教師の関係についてまとめる。
- 2 次に実際に、都内のA小学校を対象として、臨床発達心理士と教師の見立ての違いを検討する。
 - (1) 生活指導全体会資料と臨床発達心理士のデータを比較し、検討する。
 - (2) 授業参観を行い、教師の発問や動き・児童の実態から児童の実態と教師の指導のあり方について考える。また、教師にインタビューを行い、教師の活動の意味を探る。

III 研究の結果

1 先行研究の検討

近藤邦夫、鶴養啓子、芝 督子の先行研究からは、以下のようなことが分かった。

第1に心理臨床家と教師の間に見方の違いがあることである。教師は、「集団の中での個」という視点から、カウンセラーは、「1対1」という視点から子どもを見ていることが指摘されている。なぜならば、内面にコミットすることが心理臨床家の子どもに対する迫り方であるのに対して、教師はこどもの活動を通して、子どもを理解し指導しようとしているからである。

そのためにまた、第2に協働が難しいことが示された。問題の認識・アプローチ・解決の仕方の違いが、ときに両者の対立へとつながるのである。近藤(1994)は、そのことについて「子どもへの対応をめぐってわれわれ心理臨床家と学校や教師はしばしば対立関係に陥りがちである。」と述べ、その原因を心理臨床家の原理を学校に一方的に押しつけることが多いからとしている。さらに、両者は学校における立場が大きく異なるため、それにより、子どもへの対応にも違いが出てきている。

しかし、このように対立があることは分かったが、その対立の内容を具体的に検討しない限り、どのような協働が可能なかが分からない。また、立場や見方という違いのどこをどのように譲りあえるのか、あるいは譲りあえないのか、ということも判明していない。

2 臨床発達心理士と教師の見立ての違い

(1) 生活指導全体会資料と臨床発達心理士のデータの比較(都内区立A小学校の事例)

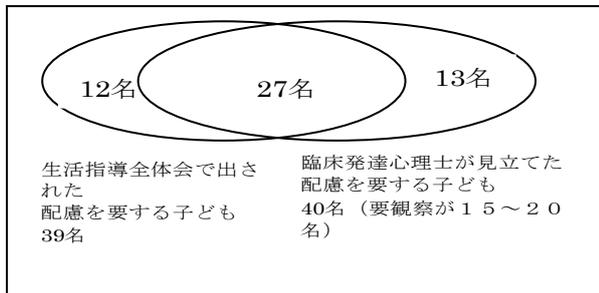
【方法】都内区立A小学校を対象とする。A校には特別支援巡回員として週に一回臨床発達心理士(a先生)が来校する。a先生が個人的に児童を見立てたメモを中心にインタビューをしながら、臨床発達心理士の見立てを明らかにした。教師については、学級担任が生活指導全体会に出した「問題を抱える児童」という見立てを参考にし、それぞれ3人の先生にインタビューした。

その結果、a先生が問題であると見なした児童は、

40名、教師が問題であると見なした児童は39名。その関係を図示すると以下ようになる(図1)。

この両者の見立ての相違はなぜ起こるのであろうか。

図1 学級担任と臨床発達心理士の見立ての違い



(2) 臨床発達心理士と教師のインタビュー調査

臨床発達心理士と教師それぞれの子どもを見る見立ての特徴や基準について、インタビューをした。調査から明らかになったことは、以下のことである。

第1に、臨床発達心理士の児童の見立ての特徴は、個人に焦点を当て、その子の問題として捉えるということである。だから、より個の見立てを正確にする為に「フォーマルなアセスメントが不可欠」としている。臨床発達心理士は、その時点の判断による定型の障害や、その障害により表れていると思われる現象を子どもに当てはめることで、発達や成長を捉えているといえる。例えば、そのようなことは以下の発言にも示されている。

「障害のあるなしに関わらず、『学齢期の発達』を判断基準にしている。」(2009. 12. 4記録)

第2に、教師の側の特徴としては、子どもの成長を長いスパンで見ていることである。「問題」とされることだけを一時的に捉えるのではなく、成長の過程としての子ども自身を、多様な要素から総合的に捉えている。個別にその児童を見るだけでなく、集団の中でその児童が、どのような関係をつくり、位置づいているのかというような観点からも把握している。また、問題があるとされる子どもに対して、常にポジティブな介入をしており、子ども自身のマイナス面だけに着目するのではなく、その子の良さを十分に活かそうとしている。

以上のインタビュー分析に基づき、臨床発達心理士と教師の見立ての違いは、何に基づくのかをまとめておく。

第1に、子どもを見る基準が違う。臨床発達心理士は、外部に尺度があり、それを基準にしている。しかし、教師は、接している時間の長さを活かし、授業な

ど日常の関わりの中で子どもを見立てる。それは、集団の中からその子を見たり、友達同士の関わりから判断したりする。

第2に、見ている領域が違う。臨床発達心理士は、子どもを「学齢期の発達」という個の内面を見ていた。しかし担任は、子どもの成長具合を、比較的長いスパンで総合的に見る。すなわち、心理臨床家は、子どもを一元的に捉えているのに対し、教師は子どもを状態や性格などから多角的に捉えているのである。

IV 考察

以上の検討結果に基づき、学校における心理臨床家と教師の協働を行っていくには、何が必要なのか提起しておきたい。

まず、教師の側の課題である。第1に、学校においては、やはり教師が心理臨床家をリードして子どもの問題に取り組む、という姿勢を明確にすることが必要である。それは、心理臨床家に比べ、教師が子どもとより深い関係を形成しており、長期的な展望のもとで、子どもを包括的に見ているからである。

したがってそのためには、教師自身の力量をつけなければならない。なぜならば、教師のほとんどは経験則を頼りにすることが多いからである。教師は、心理臨床家のような子どもの能力や活動についての「概念的」な言葉を持たないので、感覚的に子どもの状態像を語ってしまう。そのために、それ、時としての確さに欠け、迅速で具体的な対応に至らないのである。だから、問題意識を焦点化し、議論によって、知見を深め、経験を専門的知識として蓄積し、それを教師集団の中で研鑽する事が必要である。

第2に、教師の側から協働について発信していくことである。心理臨床家にその専門性を発揮してもらいややすくするには、学校現場の実情や教育原理を知り、勤務校になじんでもらう必要がある。教師は、子どもを操作対象者としては見ていない。常に一緒にいる存在として愛情をもちながら、見守り、導いている。また、1つの学校に数年に渡って勤務し、保護者・子ども・教師と信頼関係を作っていくことも重要だ。心理臨床家の課題としては、こうした学校組織や文化などに、十分な理解を示すことが必要となろう。

【参考文献】

- (1)学校臨床学への招待(2002) 近藤邦夫・志水宏吉編著 嵯峨野書院
- (2)インタビュー臨床心理士2(2007) 津川律子・安齊順子編 誠信書房
- (3)教師と子どもの関係

複合的な子どもの問題に対処し得る協働関係
ー学級担任と他の専門職の視点からー

所属校：葛飾区立南奥戸小学校

氏名：錦 織 俊 介

派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：協働・学校における他の専門職・児童の多様化・問題の複合化

づくり(1994) 近藤邦夫 東京大学出版会